

## ミヤマガラスの個体数分布の季節変化

○高木憲太郎<sup>1</sup>・今森達也<sup>2</sup>・江田伸司<sup>3</sup>・佐竹清夫<sup>4</sup>・嶋田知英<sup>5</sup>・高橋直子<sup>6</sup>・高橋昌也<sup>6</sup>・富永誠<sup>6</sup>・長嶋宏之<sup>7</sup>・平野敏明<sup>1</sup>・深瀬徹<sup>4</sup>・福島英樹<sup>8</sup>・松下彩二<sup>9</sup>・松永紀代子<sup>9</sup>・松原始<sup>10</sup>・三浦淳男<sup>2</sup>・武藤幹生<sup>11</sup>・森茂晃<sup>12</sup>・森下英美子<sup>13</sup>・山本貴仁<sup>14</sup>・吉野智生<sup>15</sup>

(1:NPO法人バードリサーチ 2:(有)北陸鳥類調査研究所 3:倉敷市立自然史博物館 4:日本野鳥の会宮城県支部 5:埼玉県環境科学国際センター 6:ふくおか湿地保全研究会 7:日本野鳥の会埼玉県支部 8:NPO法人宮崎野生動物研究会 9:三国丘陵の自然を楽しむ会 10:東大・総合研究博物館 11:秋田和洋女子高等学校 12:(財)ホシザキグリーン財団 13:(株)エコ・プロデュース 14:石鎚ふれあいの里 15:酪農学園大・獣医学研究科・寄生虫学)

ミヤマガラスは9月ごろになると大陸から渡ってくる冬鳥である。日本に渡ってきたミヤマガラスは、そのシーズン中ずっと同じ場所にいるのだろうか？それとも、国内で移動しているのだろうか？鳥インフルエンザなどの感染症の話題が絶えない昨今、人間生活との接点がある鳥の渡り行動パターンを把握しておくことは重要になってきている。

そこで、我々は各地のミヤマガラスの個体数変化から、国内での移動状況を見い出そうと考えた。調査は、およそ10km四方のひとつながりの水田地帯を1つの調査地として、その中をくまなく自動車等で走り回り、調査地内で日中に採食しているミヤマガラスをすべて探し出すという方法で、2006年10月から2007年4月にかけて、11か所の主要な調査地では10回、2か所の調査地では5回の調査を実施した。調査項目は個体数とその群れが観察された位置、成鳥と若鳥の比率、環境選択、行動(採食、休息、飛翔)である。さらに、GISを用いて調査期ごとに観察された複数の地点の中心を求め、その位置の前回の調査からの移動距離を算出した。

その結果、多くの調査地で11月下半期まで個体数が増加し、その後、日本海に面した秋田県の八郎潟、石川県の河北潟、島根県の斐伊川の調査地では個体数が減少した。この時期に逆に増加した調査地があれば、そこへの移動が予想されるが、日本海側以外の地域で12月以降に10、11月と比較して顕著な増加が見られたのは京都府の巨椋干拓だけであった。さらに12月に関しては、宮城県の仙台や京都府の巨椋干拓、宮崎県の一ツ瀬川でも個体数の顕著な減少が見られたが、この月に個体数が増加した調査地はなかった。12月の個体数の減少は日本海側から太平洋側というような大きな移動によるのではなく、調査地の周辺に分散しただけなのかもしれない。

成鳥の割合はシーズンを通して徐々に増加する傾向があったが、3月以降低下した。また、3月以降になると水田で採食している割合が高くなることもわかった。前回調査からの移動距離は、11月上半期にやや高く、3月上半期と4月上半期に高かった。

このことから、3月以降は春の渡り時期にあると思われる。また、成鳥のほうが早く日本を離れることが示唆された。水田で採食する割合が高くなるのは、餌条件が変化したという可能性もあるが、渡りに備えて力を蓄えようとしている可能性も考えられる。また、渡りの時期には採食場所が大きく移動することが示唆された。

